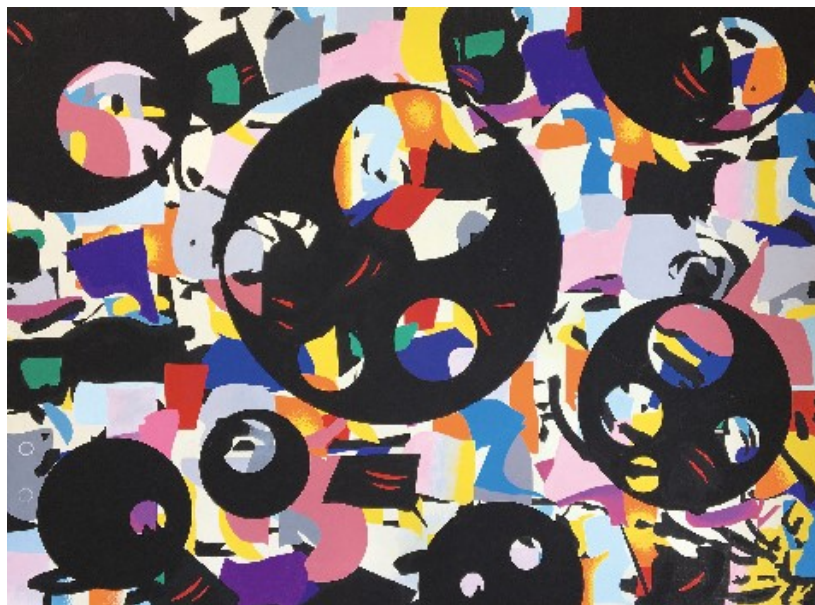


詩誌 立彩

Rissai: A Journal of Poems



第 17 号
2020 年 3 月

目次

関根 全宏

車窓 2

命の音 4

夏の庭 6

十二月闇 | 北村太郎にならって

8

伊東 友乃
新井 香菜

頭上の白さ 10
ボクはワタン 14
四角い箱 15

窓際で 16
捨てられる日 18

田中 はじめ
大山 美優

分かつているさ 19
野菜と人 20
異のもの 22
わがまま 24

心 26

詩から始めようのためのご挨拶 28
1 夕暮れのグロテスク 29
2 夜よ来い鐘よ鳴れ 30

瀬戸 薫
瀬戸 透

3 無言歌 33
4 朝 34

東野 潤
細野 藍華

微笑みは誰が讚えるのか 36
プラネタリウム 38

渡辺 信二

夏の夕暮れ時に 40
小さな筒の中 42
やって来い 44
愚か者へ 46
再び Yへ 48

表紙原画 鈴木順三

「現実には夢の中 5」 (表紙)
「現実には夢の中 4」 (裏表紙)

車窓

関根 全宏

大きな川が流れている
遠くには霞んだ山
傍らには枯れた草木が
夕陽をうけ
橋の影が落ちている
鳥がたち
川面にも
同じ空がある
遠くには霞んだ山
傍らには枯れた草木が
橋を渡ると
堆積した時間が
またひとつ層を重ね
故郷を背に

ひとりわたしは
人知れず死んだ者たちの
時間をおもう

命の音

関根 全宏

風が吹いて木がゆれる
葉がすれて夜がふける

誰もいない道端に

ぽつんとひとつ 実が落ちた

夢うつつ うす明かりのなか

願いをのみこもうと 目をとじる

もう 愛するひとはいない

雲はうつすら出ているだろうか

思い出されるのは

誰もいないキッチンに残りもの

それに 朝 戸口で

いつまでもぐずつく姿

遠くで鳥がひとつ鳴き
ぽつんとひとつ また落ちた

夏の庭

関根 全宏

夏の庭

眩い光がそそいでいた
小さな虫が何かの死骸を
地面のひびをよけながら
庭の隅まで運んでいた

あなたがこっそり植えた種は
一度だけ小さな芽を出した
しかしそれは異物と思われ
知らぬ間に摘まれてしまった
小さなよろこびが
一つの善意に奪われ
拭い難いしこりが残った

あなたが死んでから
霞がかった

粗い光の粒子の中を
小さな天使が円を描き
いつまでも舞っている
音の無い世界
そこはわたしとあなたの
墓場である

十二月闇——北村太郎にならって

関根 全宏

雨があがった闇を見ていた

点々とした小さな光が

濃い霧の中に浮かんでいた

台所に目をやった

湯気で部屋の湿度があがっていた

テレビがずっとついてた

本当のことなどどこにも映っていなかった

ぼんやりと詩集を開いて

詩を読んでいた

おわりの雪とか

怒りの構造などいい詩だと思った

どこかで貰ったらしいお茶を飲みながら

葬式の場面から始まる映画を何篇か思い出した

喪服でとんかつを食べる人のことも思い出した

上からこつこつと物音がきこえてきた

去年は気にならなかったような気がした

墓地は寂しさが集まる賑やかな場所だと思った
雨があがった闇を見ていた
霧はいつこうに晴れそうになく
今は何も見えなかった

頭上の白さ

伊東
友乃

空っぽであるはずの空間に
流れるものがある

上昇をみたあと

その変化はおどろくほど速い

いつも 完全とはいいがたい

数時間ほどの

記憶を欠いて 生きていて

息を ふかく

吸ってから

探されない部分

胸のあたりが

あたたかい

空の温度の

微小な変化に対して

吸収された熱は

季節を

かけぬけ

音をたて

乱暴にやってくる

そうっとたちあがれば

濡れた草

二匹の蝶が

同じ道をたどり

ピンク色のアパートのむこうに消えて

懐かしいのは

そのむざむざしい色

もう

一生の

はんぶんが過ぎ

ずっと寝ぼけていたのか

気づいたら
木立のなかの鳥は
激変していた

ずいぶん 抱えこんだ

腐植物みたいな

感情が

打ち消しあつて

溜まっている空気と

混じりあう

ほんの一部が

あやうく

宇宙に滑りだしそう

そこも

おんなじくらい

所在不明だと

頭上の

真昼の白さが
物語るには

ボクはワタシ

新井
香菜

みんなは変身できるベルト
ちがう 魔法ステッキがいい
みんなはボタンのついた黒い鎧
違う そんなのは纏わない

十八度目の春

長い黒髪 赤いピアス
あなたのために選んだわけじゃない
白いブラウス 青いスカート
あなたのために選んだわけじゃない

誰にも言えなかったボク
誰かに言いたい新しいワタシ

四角い箱

新井 香菜

四角い箱がありました
大きなようで 小さな箱です
中身は見えそうで見えな
い
そんな箱です
お父さんにもお母さんにも見えやしない
箱の中は私だけが知っている
そんな箱です
箱の中は暗くておそろしい
外見はあんなに色とりどりの箱なのに
箱の中は寒くておそろしい
こんなはずじゃなかった
誰か重い蓋を開けてください
私が狭い箱の一部分でも
広い世界の一部分でもなくなってしまう前に

窓際で

新井
香菜

そうか もうこんな時間か。
子どもたちの笑い声

オレンジの焼ける外の世界

花瓶の中の水が減るように

毎日 毎時間

毎分 毎秒

この街も あなたも

わたしも 減る

どんなに華やかなあなた

褪せた花のようなわたしだって

いつかは朽ちてしまうのだろうか

そうか もうこんな時間か

そろそろ朽ち果ててしまうみたい

午後五時五十八分の窓際で

捨てられる日

新井
香菜

燃えるごみの月曜日

四角の中に写る思い出たち

空き缶の火曜日

つぶされた缶とあたしの心臓

燃えるごみの水曜日

あなたの気持ちちが込められた文

空き瓶の木曜日

いまだ濡れている瓶とあたしの瞳

燃えるごみの金曜日

大きな穴の開いた靴下

燃えないごみの土曜日

ひとりぼっちの部屋

あなたの居ない十度目の日曜日

ぴかぴかの足元で踏み出す

分かっているさ

田中 はじめ

昨日も会えなかったように
今日も会えない 分かっているさ
明日も会えないのだろう

おれは 分ならず屋でも
ストーカーでもないさ
安心してくれ 大丈夫

勤め帰りに きみの通る
暗い小道の物陰に
もう潜んだりしない 約束する

だから せめては LINEを
既読にしてほしい 返事はいらない
見えない向うに きみがいると知りたいただけだ

野菜と人

大山 美優

(※作者に電子版への掲載許可が取れないため空白)

異のもの

大山 美優

(※作者に電子版への掲載許可が取れないため空白)

わがまま

大山 美優

(※作者に電子版への掲載許可が取れないため空白)

心

大山 美優

(※作者に電子版への掲載許可が取れないため空白)

詩から始めようのためのご挨拶

瀬戸薫

父の書斎を整理しておりましたら、フロツピーディスクの束が出て参りまして、なかに「詩から始めよう」と鉛筆表記された数枚がございました。データ変換を依頼し中身を覗いてみましたところ詩のような書きものが出てまいりました。「千年代、十代二十代詩集」というタイトルがついております。若い日、父瀬戸透がこのようなものを書いていたとは聞いたことがあるような気もいたしますが、記憶は定かではありません。父と私との間は概してコミュニケーションが円滑とはいかず、こんなことにもこのように正確を期しえぬありさまで恥じ入る次第ですが、特にこの十年ほどは音信不通にて、といって、その要因は私の方にあるのですが、父との接触を避けておりました。この間、老母とも二人の妹とも同様にて、今回、父危篤の知らせとともに再会を果たしたという事情でございます。

フロツピーの内容を皆さまに見ていただくことにつきましては、渡辺信二教授のご提案に負うところ大であります。先生の亡父への御友情に感謝申し上げます。最後に息子として、一言感想を述べさせていただきますと、通読していただくころおだやかならぬものが沸き上がってきたというのが正直なところでございますが、その詳細に触れることは今は措き、ひとまず詩の体裁をとっているとおもわれるものを順不同にて転記させていただきます。数字は整理のために私が付したものです。

瀬戸透 1950-2020 大学教授

千年代、十代二十代詩集抄

瀬戸透

1 夕暮れのグロテスク

土曜日

人は

影を

隠す

ために

影を

あるく

土曜日

色あせた

昼が終わると

街角で子どもが

一人ずつ

静かに

狂って

行く

土曜日

風船のように

ふくらんだ

頭を

かかえて

子どもは

一人ずつ

夕陽のなかへ

逃げて行く

2 夜よ来い鐘よ鳴れ

鳥は舞いながら嘴をそろえる

そこには孔が

ふたつ空いていて

夜の中で

鳥は息をしながら翼をとじる

(1970)

そのまま

夜空をよぎってきて

洗面器をくつがえす

限りのない首振りをつづけて

魚の瞳をくりぬくさらに

魚のからだをふくらます

水ははずんで

鱗を光らせ

魚眼を濡らす

「魚は死ね」という

お経をとなえながら

ぼくは眠っている団地を巡っている

鳥がぼくの名前を呼んでやかましい

みる 頭のうしろ

鳥は瞳を回しながら

群れになって落ちて行く

そしてぼくの頭のうえに翻って鋭く鳴いて
ひとの瞳をほしがるとき

ぼくは両手をひろげ はばたく

鳥の姿で魚を呼ぶ

魚よ と

声は夜を裂きながら流れ

揺れる星座を解体する

死んだ魚の目が川原一面に散らばって

ぼくは両手に拾った眼玉をぶらさげて

夜の川原にたっている

言葉をくり返す

言葉をくり返す

猫のように

ぼくは

夜の中で宙返りしながら

魚のあぎとをあばいた

おお 鳥は朝焼けの空でしずかに舞い狂い

魚は緑の 대기の中へ吊り下げられているではないか

(1970)

3 無言歌

おまえを夜空に磔る十字架は火柱のたつ樹であった

白蟻が這い白蟻が燃える樹であった

おまえを土中に葬る棺は孕むことのない樹であった

狂女が攀じ登り狂女が股を挟む樹であった

おまえは樹木の精なる体液を浴びるだろう

ささめきながらよどむ樹齢二千年の巨木の影に

おまえは樹木の精なる緑にまみれるだろう

ゆがみながらどよむ樹齢二千年の巨木の梢に

おまえに笑いかける毒塗られた祠をみあげよ

黒い糜爛の頬をすりよせながら深く飲みあう少女たちの涎のひかり

おまえに笑いかける朱塗られた鳥居をみあげよ

腐肉をくわえながら排泄して行く鴉の脚の鱗のひかり

おまえの呪われた血は暗流となつて海流を支えてきた

おまえの呪われた血は嬰兒のしたたりとなつて動物たちの陰囊をみたしてきた

おまえの呪われた血は樹液となつて葉脈から溢れでた

おまえがつぶやく悲鳴は野井戸の底へ沈んで行く

おまえが襲う女は石に還つて行く母である

おまえが砕く地蔵の首は山から里へ呻きを渡す

(1970)

4 朝

静かにのぼる

静かにのぼる

梅干し太陽が

赤くなる

赤くなる

梅干し太陽が

すっぱい

すっぱい

歯がこぼれる

梅干し太陽に

新鮮

新鮮

梅干し太陽は

(1968)

微笑みは誰が讚えるのか

東野 潤

ぼくは牧師ではありません
ぼくのほんとうの仕事は何なのでしょうか

おしゃべりする若者たちと

微笑を交わせたら良いのに

ぼくは うつむいて 足早に 姿を消す

疲労困憊の身には

笑い声が心身に痛々しく響く

眼をつむり 耳を塞ぎ 電車の片隅にうづくまる

明るいのに 暗い

そばに人がいるのに 寂しい

使命感に燃えて始めたことなのに つい 嫌になる

じぶんの不安も解けず

命の続きを知らず

風に吹かれる枯れ葉のごとく

秋の冷気に震える

すべからく祝福せねばならない 褒めねばならない

それは 分かっているのだが

ほんとうは 日ごとに

せめては 日曜日ごとに

ぼくこそが すべてを讃えるべきであるのだが

プラネタリウム

細野 藍華

足を踏み入れるとそこは別世界
ゆつくりとした時間の中で

アロマと音色に包まれ
心が 身体が 休まってい

きれいな星たちが

この小さな箱の中でキラキラと輝いている

きれいな星たちが

数えきれないほど輝いている

この中は幸せに満ちている

それなのにどうしてだろう

涙が溢れて止まらない

それは真冬の双子座流星群のように流れていた

別世界から戻ると

外はすっかり暗くなっていた

ふと目に入ったカッブルが

お揃いのペンダントをつけていた

それは先に見たきれいな星のようだった

夏の夕暮れ時に

細野
藍華

君が僕に微笑んでいる

風も木の葉も微笑んで

君はきれいな金髪をゆらしている

それは夕日に溶け込んで

君が僕に微笑んでいる

花をたくさん抱えて

君は青い瞳をゆらしている

それはきらきら輝いて

君が僕に微笑んでいる

僕は君の手をとって

君は小さな手で握り返してくれる

それは夕日で影を落として

君と僕が微笑んでいる
これからもずっと一緒に

小さな筒の中

細野
藍華

くるりくるりと

回して覗く

青空の下に輝く

彼女に似ている

くるりくるりと

回して覗く

夕空で頬を赤く染めた

彼女に似ている

もう一度同じ景色を見たくて

くるりくるり

だけどすでにそこは

違う景色に変わっていた

過去に戻ることはできない

それは不思議と
僕たちの住む世界と
同じだった

それでも僕は回し続ける
この世界でできなくても
小さな筒の中を覗けば
いつか戻れると信じて

何万分の一の華に
もう一度会えると信じて

やっ来て来い

渡辺 信二

やっ来て来い

やっ来て来い

インスタ映えする夕焼けよ

ぼくは待ちに待ち

待って 待って すでに

20年

一瞬の夕陽に

フォトグラフィアの命を賭けて

あの永遠を ぼくは 撮りたい

たかだか 20年

だけで 20年

若い心の裏切りに 傷つき破れたぼくの魂が

全世界を相手に 一発 大勝負

フォロワー100万人を狙う

さあ 地球を揺るがす夕焼けよ

おまえが包めば この世の全てが

幻想と化し

ぼくらすべてが影となり 滅びるがいい

来い 来るがいい 最期の夕焼け

無数の影が 永遠には 必要なのだ

茜色の光よ 最期のともし火となれ

愚か者へ

渡辺 信二

わたしは 知らず知らずのうちに
わたしの死を生きている

思えば 初めは 地べたを這い
土を舐め 太陽を恐れた

よろよると立ちあがった時
何かがわたしを支えてくれた

それ以来 日々が行き去り 鳥がさえざるが
いつも先行きに不安を抱え 躊躇 逡巡してきた

今 わたしは 息を整えることもできずに
魚の跳ね返る川を渡る

あの山を求めながら この海のほうへ向かう

いずれでも 彼の地へと向かうと知らず

死ぬことが 生きることだと知らず
見守りを信じられずに あなたの眼差しを求めた

どこから 声が聞こえるのだろう

「それは おまえがおまえの生を生き切った時だ」と

それは とは何でしょう

もっとはっきり言ってください わたしは 救われますか

声と言う 「愚か者

救済の有無がおまえの生き方を左右するのか」

おお まだ わたしは死ねない

死がただの通過点だと知るまでは

再び Yへ

渡辺 信二

経験を切除は出来ない
死蔵や密閉はできるが
告白を抹消はできない
無視や忘却はできるが

日本語にも 虚構を語る時制と
事実を述べる時制があれば

経験を物語とし 告白を虚構として

まったく新たな世界を創り出せるのだが
語りか騙りか いずれにしても
この密閉した過去を白日に曝し 罰を請い
無視してきた告白を経験として生き直したい

ゆうこ また ゆうこと会いたい

「インタビュン展 Vol. 2」のお知らせ

2013年3月発行の『立彩』特別号以来、表紙のデザインを手がけてくださっている鈴木順三氏が、来たる5月1日13時から6日16時まで、練馬区立美術館区民ギャラリー（〒176-0021 東京都練馬区貫井 1-36-16：最寄駅の西武池袋線中村橋駅から徒歩3分）にて「インタビュン展 Vol. 2」を開催します。2日3日4日5日は、10時から18時の開場です。

『立彩』も展示予定ですので、お誘い合わせの上、ご来場ください。

なお、期間限定のホームページ「2020 Intervision」も立ち上げました。

<https://pop23618.wixsite.com/intervision>

Instagramは下記のQRコードで「インタビュン」という告知ページにたどりつけます。



2019,09,01 より 2020,02,28 のあいだに贈られた詩誌ほか

『りんごの木』51, 52。

『白亜紀』151, 152, 153, 154。

『万河・Banga』21。

『GATE』28。

雑誌

『奏』Soh 2019 夏号。

詩集

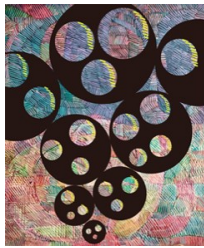
岩永弘人『風が語って行った事』音羽書房鶴見書店、2018。

書籍・論文・エッセイその他

戸塚学ほか編著『世界文学アンソロジー』三省堂、2019。

別府恵子『「聖母子像の変容—アメリカ文学に見る「母子像」と「家族のかたち」—』大阪教育図書、2019。

矢野久美子編著『ポピュリズムとアート』2018 フェリス女学院大学学内共同研究報告書、2019。



詩誌『立彩』第17号 2020年3月20日発行

頒価 300円

編集発行 「立彩」

〒400-8555 山梨県甲府市横根町 888

山梨英和大学人間文化学部 渡辺信二研究室 気付

印刷 東洋出版印刷株式会社 TEL 03-3813-7311